

---

# キラキラレクイエム

岳石祭人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キラキラレクイエム

### 【NZコード】

N8932R

### 【作者名】

岳石祭人

### 【あらすじ】

暗い海を大きな豪華客船が星の世界へ旅立つ。大人たちはこの旅の意味を知っている。子どもたちは綺麗な星々に無邪気に喜んでいる。星の世界を旅する乗客たちはそれぞれの下りるべき宇宙島に下りていく。船が最後に行くべき場所は。

## その1 旅立ち

真つ 暗な海を大きな船が旅立ちます。

大きな、世界一の豪華客船です。

船は真つ暗な中、大きな波に乗り、宙へ、飛び出します。

そして船は、そのまま高い高い空へ上つていき、やがて、地球の外でも飛び出します。

真つ 暗だった辺りは、後ろから真つ青なライトに照らされ、振り返れば、美しい地球が輝いています。

前を向けば、黒いビロードの空に星の数はどんどん増えていく、まるで銀色の光の海です。

大きな船には、甲板いっぱいにおおぜいの乗客がいました。

大人たちはこれが現実のことではない、夢の出来事だと知っています。自分たちがこうして夢を見ている意味も。

子どもたちは、光を当てたサファイアのような地球と、見たことのない無数の星のきらめきに目を丸くして喜んでいます。

でも、お父さんお母さんとこっしょの子どもはよこのですが、お父さんお母さんとばぐれて、ひとりぼっちでいる子どももいます。

彼は不安そうにきょりきょりし、お父さんお母さんを捜しました

が見つかりず、寂しくじしゃく泣を垂れました。

自分たちの子どもを捜していた若い夫婦がそれを見つけて声を掛けました。

「お父さんお母さんがいないのかい？　だいじょうぶだよ、わたしたちが一緒にいてあげるからね。」Jの船に乗っていないのは、きっと、いことなんだよ」

と、自分たちにも言つて聞かせると泣き止みました。

子どもはたずねました。

「Jの船せりJに行くの？」

「わひと、こい所だよ」

「ほんとうに。それじゃおお父さんお母さんに乗れなくてかわいそうだね？」

若い夫婦は可笑しいのか悲しいのか分からぬ複雑な顔をしました。

「君のお父さんお母さんも、こすれ、もひとつひとつと後の船に乗つてくねる」

「あーあ、お父さんお母さんと回じ船がよかつたなあ

「こや、Jの船せりと特別に豪華なんだよ。お父さんお母さんはもひとつ小さな普通の船で、別々に乗つてこなくてはならぬこと思つ

よへ

「ふうん。じゃあ僕は運が良かつたんだね？」

「うそ……、嘘……なのかな……」

若い夫婦は額を寄せ合ひてそっと涙を流しました。

船はぐんぐん進んでいき、青い宝石の地球は、どんどん小さくなっています。

乗客たちの、長い船旅の始まりです。

## その2 大きな流れ

遠ざかっていく地球に、

「ああ嫌だ、俺は帰りたい！」

と、どうしても戻りたい人が救命ボートを下ろす準備を始めました。すると「俺も」「わたしも」と急いで手伝う人たちが現れました。

彼らはボートに乗り込み、真っ黒な宇宙に下りました。

必死にオールを動かして地球に向かおうとします。

しかし、何もないと思っていたボートの周りに、銀色の水切り波が現れ、地球から外へ向かって大きな流れのあることが分かりました。

ボートの乗員たちは一生懸命オールで流れをかきましたが、流れはとても大きく、進むどころかどんどん押し流されています。

「ああ嫌だ、俺の家が遠ざかっていく…」

我慢できない人が流れに飛び込んで泳ぎだしました。

ボートは2艘、3艘、4艘と、続々宇宙の海に下りて、一生懸命地球に帰ろうとしました。

流れに飛び込む人もたくさんいます。

しかしどんなにこいでも、泳いでも、流れをさかのぼることは出来ず、泳ぐ人は泳ぐのをやめ、ボートをこぐ人はこぐのをやめ、皆とても辛そうな顔で遠ざかっていく地球を眺めました。

ほとんどの人が諦めてしましましたが、決して諦めずに頑張つて泳ぎ続ける人もいます。

彼らは、頑張つて、頑張つて、力つきてしまったのでしょうか、真っ黒で透明な流れの中に姿が消えていき、いなくなつてしましました。

彼らが無事地球に泳ぎ着けたことを祈りましょう。

### その3・遭難者

救命ボートはみんな元の船に戻りました。

ところがもう一艘、先の方で救命ボートが漂つていて、豪華客船が近づいてくると一人乗っていた女人人がおーいおーいと手を振つて助けを求めました。

大人たちが協力して繩ばしを下ろし、女人を甲板に引き上げてやりました。

昔の映画女優みたいに綺麗な人です。

「ああ、ありがとうございます。おかげで助かりました」

と女優さんはお礼を言いましたが、頭がくらくらしているようでふらふらしていました。

子じもが

「お姉さん、だれ？」

とききました。女優さんは、

「はて？ わたしはいつたい誰でしょう？」

と、とんちんかんなことを言つて首をかしげましたが、うんうんと一生懸命考えて、ますます頭がくらくらしてきました。頭を回して、「あらそだわ！」と嬉しそうに何かひらめきました。

「わたしはクララよ。天海（あまみ）くらら。よろしくね？」

と、これで一安心といったよつに、一少 ロリ笑つてお辞儀しました。  
変なお姉さんです。

## その4・返し波

地球が後ろに離れていき、銀色の月がまん丸く、大きく近づいてきました。

すると、その輝きの中から大きな波が現れて向かってきました。波はとても大きく、大きな豪華客船を進ませないほど大きく、船は立ち往生しました。

船の先で波しぶきが弾け飛びます。

甲板にいる人に波のしぶきがかかると、しぶきのかかった人はなんだかとても悲しい気分になってしましました。

しぶきのかかった子どもはえんえんわんわんと泣き出しました。

子どもたちが泣き出すと大人たちもシクシクと涙をこぼし、とうとう耐えきれずに子どもたちと一緒になつて声を上げて泣き出しました。

ああ悲しい。悲しくて悲しくて、身が引きちぎられそうだ。

乗客たちが泣き叫ぶと、波は船の周りでぐるぐる渦を巻きだし、渦はどんどん大きくなり、船は大渦の中へ下りていきました。

渦は泣き叫ぶ声にどんどん巨大になっていき、その尖った底はどんどん深くなつていき、真っ暗な水底に、真っ赤に煮えたぎるマグマが見えてきて、カツカと船を照らしました。

恐ろしい熱を感じて乗客たちは悲鳴を上げました。

渦の壁の向こうには、ぼろぼろの難破船が骸骨たちを乗せて、骸骨たちは新しい仲間を歓迎してカタカタと踊りました。

船はどんどん渦の底に向かって落ち込んでいきます。ああこのままでこの船も本当にあの幽霊船の仲間になってしまいます。

## その5 -トロイメライ

船の中からポロン、ポロン、トピアノの音が聞こえてきました。

とても優しく、幸せな、眠くなつてしまいそうな曲です。

でも演奏はとても下手くそなので調子が狂つて眠れません。

誰か曲を知つていてる人が

「トロイメライだ」  
と言いました。

船内への階段に近い人たちが誰が弾いているのか見に行きました。

この豪華客船には大粒のダイヤがいっぱいぶら下がつたシャンデリアの大ホールがありますが、そこでピアノを弾いているのはボートで漂つていた映画女優のお姉さん、天海クララさんです。

ピアノが下手くそなクララさんは、どうやらそれしか弾けないようで、「トロイメライ」をくり返しました。

あんまり下手くそなので、音楽を勉強していた大学生のお姉さんが代わつて弾きました。

ポロンポロン、ポロンポロン、  
ポロンポロン、ポロンポロン、

ああ、とても優しく幸せな音楽です。

ホールに下りた人たちはダイヤモンドの輝きの中にそれぞれの懐かしい思い出を映し出し、とても悲しいけれど、嬉しい、優しい気持ちになりました。

船の外でも、渦の中心の上に銀色のミラー ボールが浮かび、キラキラ輝いて、やはり乗客たちは自分の思い出を映し出し、懐かしがりました。

乗客たちの泣き叫ぶ声が消え、優しい気持ちが溢れると、ミラーボールは上昇を始め、船はそれに引っ張り上げられるように渦をさかのぼり始め、とうとう、外へ脱出することが出来ました。

渦が消えると、月から押し寄せていた悲しみの大波もやんでいました。

大きな銀色の月が、とても綺麗です。

船が大渦を脱出するとき上がった波のしぶきがたくさんの泡になつて後ろへ、地球へ向かつて流れていきます。

あの中には船に乘る人たちの故郷への懐かしい思いがたくさん詰まっているのです。

地球に残る人たちにも行く人たちの優しい感謝の心が届くことを祈りましょう。

## その6　港

豪華客船は月を越え、更に向こうへ進みます。

大ホールのステージにはピアノのお姉さんその他にもヴァイオリンやチェロやフルートを演奏できる人たちが加わってちょっとしたコンサートになっています。

リストの「愛の夢」や  
ショパンの「別れの曲」  
アルビニーのアダージョ  
バッハのG線上のアリアなど、

誰でも聞いたことのある有名な曲の中でもやはり静かな、ちょっと悲しく、悲しさをそっと包み込んでくれるような曲が演奏され、たくさんの人たちがしみじみと聴き入っています。

ちょっと寂しくなりすぎたのでモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」が演奏されました。

小さな子どもたちも知っているメロディーに大喜びしていつもに歌い出したので、楽団員は笑顔でうなずきあつて「きらきら星変奏曲」を続けて演奏しました。

外では、甲板の人たちが前方を指さして騒ぎ出しました。

星がいっぱい集まつて、

砂浜のように広がつてあります。

船はそこへ向かつていき、少し沖で横を向いて止まりました。

星の砂浜の向こうには、何もない野原に、ぽつぽつと、小さな家だけがまばらに建つていました。

なんだかとても寂しい所です。

船はずつと止まつたまま動き出さうとしません。

ホールで音楽を楽しんでいた人たちも甲板に上がつてきて陸地を眺めました。

さわさわと落ち着かない空氣の中で、何人かが「ボートで下りてみようか?」と言いました。

でも彼らはいつたん砂浜に下りてしまつたらこの密船には戻つてこられないように思つて、なかなか勇気が出ませんでした。

なんだかこの場所で下りてしまつと、その後でとてもたいへんな思いをしなければならない気がします。

しかし振り返るとお月様は綺麗で、その向こうに、小さいですが、青く輝く地球が見えます。

「これから先に行つてしまつたら、もうあの地球は見えなくなつてしまつでしょう。」

少しでも自分たちのいた世界に近い所にいたい人たちが、勇気を出して救命ボートに乗り込み、海面に下ろされました。

救命ボートは波に招かれ、砂浜に滑り込みました。

砂浜に降り立つた人々は、その向こうの野原へ歩いていき、姿が見えなくなりました。

彼らがこの大地で立派な家やビルを建てて素晴らしい社会を築いていくのを祈りましょう。

船は沖を進みだし、次の港に向かいます。

## その7 天の川の外れ

船は次の島、次の島へと進んでいきました。

それぞれの島で、ここが自分の生きる場所だと思った人たちが救命ボートに乗つて砂浜へ上陸しました。

島は訪れるたびどんどん建物が増えて、立派になつていきました。

綺麗な町並みが築かれ、大きな遊園地が出来て、子どもたちは大喜びでお父さんお母さん、子どもによつてはお祖父ちゃんお祖母ちゃん、お兄さんお姉さんの手を引いてボートに乗りたがりました。

お兄さんお姉さんが考え込んでいると待ちきれないで一人でボートに乗り込んでしまつ子どももいました。

お兄さんお姉さんと離れてしまつても、一緒に島に向かう仲間がたくさんいるので平氣でしよう。

島へ向かう人たちは、子どもも大人も、みんな希望に顔を明るく輝かせています。

ボートの乗員が島に上陸して町並みに入り込んでしまつと、客船の乗客にはその姿が分からなくなり、彼らの新しい生活を祝福しながら、船は次の島へ向かうのでした。

たくさんあつた救命ボートですが、とうとう最後の一つになつて

しました。

乗客の数もだいぶ減つて、ホールで演奏していたお姉さんたちも途中の島に下りてしまい、船内はすっかり静かに、寂しくなつてしましました。

眩しい夏の日を浴びた海のきらめきのようだつた無数の星々も、向かう先には数がうんと減つて、真つ暗な宇宙が広がるばかりです。

星の海に浮かぶ、おそらく最後の島に到着しました。

「」はもう乗客の見知つている街の景色ではなく、つるんとした、お菓子の飴で出来たような不思議なビルがたくさん建つた、未来都市でした。

船に残っていたほとんどの乗客がボートに乗りました。大きなボートなのでまだ余裕がありましたが、数人が船に残るつもりのようで、見送る側に回りました。

途中で乗つてきた映画女優のクララさんが残りうつとする乗客たちに言いました。

「下りないんですか？」の先にはもう人間の住む島はありませんよ？」

残りうつする数人の中にはお父さんお母さんとはぐれてしまった子どもの姿がありました。この子に優しく話しかけてくれた若い夫婦は3番目の島で心残りそうにしながら下りていきました。

「」の先にはなんにもないの？」

クラリスとはつなづきました。

「なんにも。あるのは、光だけです」

最後のボートは、ほんの数人を残し、最後の島へ招かれていきました。

彼らが生きる社会が平和で、慈愛に満ちた素晴らしい未来であることを祈りましょう。

船は、天の川銀河を離れ、外の宇宙へ進んでいきます。

## その8 赤いバイキング船

大きな豪華客船は真っ暗な何もない宇宙に自分の明かりを寂しく浮かべながら進んでいきます。

子どもはクララさんになりました。

「IJの船と僕たちはどつなるの？」

大人たちもクララさんの答えを聞きたがりました。

「宇宙はとても広いのです。次の銀河に到着するため、この船も今ぐんぐんスピードを上げて光の速さに近づいています。

光には形がありません。

わたしたちは一つになつて、わたしたち自身が一つの星になるのです。

光は広がり続ける宇宙の一一番端っこなのです。

わたしたちは自分の世界を離れて遠くへ、遠くへ、離れていくついますが、実は遠くへ離れながら時間をさかのぼっているのです。

今見えてきた次の銀河、アンドロメダ銀河は、わたしたちの過去なのです。

わたしたちはあの星の一員になつて、同胞たちの行く末を見守るのです。」

クララさんの説明を聞いた大人たちは青くなつて慌てました。

「冗談じゃない、そんなのは嫌だ！」

「ああ、そんなことならもうとつんと早く船を下りておくんだつた！」

「ああ、俺はなんて馬鹿なことをしてしまつたんだろつー！」

「ねえあなた、なんとかならないか？」

「なんとか元の世界に帰る」とは出来ないのか？」

すつかり後悔して泣きつゝ彼らにクララさんは言いました。

「本気で帰りたいのなら、あれに乗るしかありませんよ？」

クララさんが指さす先、まだまだ遠くに図鑑で見るような真ん中の膨らんだ皿盤のような姿をしたアンドロメダ銀河を前に、赤い光が近づいてきました。

それは船首にフェニックスを載せた、真っ赤に燃えるバイキングの船でした。

クララさんの目が赤く光り、髪の毛が真っ赤な炎となつて燃え上がり、怖い顔をした仏様の仲間の仏像のような姿になりました。

「さあ！ 過去に帰りたい者はあの船に乗り移れ！ ただし、無事  
帰り着ける保証はないぞ？」

これは運命との闘いだ！

なにがなんでも生き抜く炎の心を持たない者はここで大人しく光  
となるがいい！」

クララさんの変身した恐ろしい姿を見た大人はすっかり怖じ気づ  
いてしまいましたが、何人かは勇気を振り絞り、「よおーし！」と  
客船の隣に横付けされたバイキング船に炎を飛び越えて乗り移りました。

「よーし。では締め切るぞ。残りの者たちよ、さらばだ！」

クララさんは大きく手を振り、船に残る子どもに、一ノハシと悪戯  
つぽく微笑みかけました。

口に手を当て、一つそり教えてやりました。

「光になつて星になれば、いつでも天使になつて好きな場所、好き  
な時間に行けるわよ？」

バイバーイと手を振つて阿修羅のクララさんも真つ赤に燃えるバ  
イキング船に飛び移りました。

「さあー皆の者ー 命懸けで運命に立ち向かえ！ しゅつぱーつー！」

## その9 赤い流れ星

客船から乗り移った人々は細長い船体に縦に並び、左右のオールを掴みました。

「オー・エス！ オー・エス！」

先頭に立つ阿修羅の掛け声に合わせて一斉にオールを漕ぎます。

救命ボートでは立ち向かえなかつた大きな流れを切り裂いて、炎のバイキング船は天の川銀河向かつて突き進みました。

船首のフニーックスが翼を広げ、「ケーン！、ケーン！」と甲高い声で鋭く鳴きました。

「オー・エス！ オー・エス！」

阿修羅の掛け声に、

「オー・エス！ オー・エス！」

運命に挑む者たちも声を上げ、力いっぱい重いオールを漕ぎました。

汗が噴き出し、それは炎となつて体に巻き付き、彼らの姿もクララさんのよつたな阿修羅に変身していきました。

オー・エス！ オー・エス！

バイキング船は快調に天の川銀河に漕ぎ入りました。

オー・エス！ オー・エス！

星々のきらめきが線になつて後ろへ流れていきます。

オー・エス！ オー・エス！

大型客船で立ち寄つてきた宇宙島を追い越していきます。

オー・エス！ オー・エス！

猛烈な勢いで突き進む炎のバイキング船は、ああ、とうとう月に近づき、その向こうに青い地球が見えてきました。

オー・エス！ オー・エス！

バイキング船は喜び勇んできますます激しく速度を上げていきます。

オー・エス！ オー・エス！

しかし、月を過ぎると地球から大きな激しい波が襲つてきました。

波はバイキング船を飲み込み、黒々とした渦を巻き、バイキング船を真つ二つに叩き割り、さらに引き裂こうとしました。

わあつと総崩れになる船員たちに阿修羅は命令しました。

「ゴールは間近ぞ！ なにがなんでもたどり着け！ 自分の力で戦い抜け！」

船はもうバラバラで、人間はそれぞれが船体の割れたボードに必死にしがみつき、自分で水をかき、大波に挑んでいきました。その波の向こうに見えるふるさとに帰るために。

真っ赤に光る流れ星が、地球に向かつて下りていきます。

あるいはバラバラに弾け飛び、あるいは途中で燃え尽き、彼らの内いくつが地表にたどり着けるか。

戦う彼らが、一人でも多く運命に打ち勝つよう、祈りましょう。

## その10・星

アンドロメダ銀河に至つた船は、星となり、その形を無くしました。

しかし星から放たれた光は、遠いふるやとの宇宙を日探し、時間をさかのぼり、自由に人々の営みを眺めることができました。

地上に暮らす人々が、天に瞬く輝きに気づくでしょうか？

心は自由に空間を、時間を超えて、広がります。

その時、その場所に喰まれる喜びも、悲しみも、心は自由に駆けめぐり、

確かにそこにあつた人々を、

永遠に忘れることなく、

見つめ続けるのです。

愛しもと懐かしもとの眼差しで。

過去から未来へ、また過去へ未来へ、

時は一つの輪になり、この宇宙を成しています。

宇宙と一つ一つの輪の中に、全てはあるのです。

失われたものも、実は、何一つ無くなつてはいないのです。

生まれてしまつた悲しみも、やがて愛しさに変わり、

新しい命へと注がれます。

ただ、今は、

心を込めて静かに祈りましよう。

生きてこる者も、かつて生きていた者も、

全ての魂に平穀のある「ひと」を。

祈りましよう。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8932r/>

---

キラキラレクイエム

2011年10月4日12時16分発行